

<パネルディスカッション>

永井：では、全体の討論会に移りたいと思います。会場から集まったご質問を読み上げます。

木本報告の最後の事例や、上村報告にもあるように、雇用労働でもなく家事労働でもない地域活動に生きがいを見いだしている女性は少なくないと思います。これは、政府の共助の奨励や、地域創生、あるいは地域共生社会を目指す近年の福祉政策と合致しています。しかし、上村報告にあるように、低収入もしくは無収入のシット労働であるケースが多く、しかも女性が担っていることが少なくありません。女性は相談員、ケア労働など、あたかも主婦や母親のように地域で実践しているように見えます。このような女性労働の広がりについてどう思われますかということです。

上村先生、今のご質問、ご意見について、いかがでしょうか。

上村：その点について、むしろ木本先生のご見解を伺ってみたいなと思っていたところです。社会的に大事な仕事を低収入、無収入でやってもらってしまっているという問題ですよ。ケア労働者や相談員などです。そこに保護が必要だと。ケア労働の賃金をきちんと確保していかなくてはいけない、労働条件を確保していかなくてはいけないということが一つあると思います。

それをディーセント・ワークにしていけないといけないということもあると思いますが、一方では、社会における役立ち方にはいろいろなタイプがあるので、どのような働き方をしても不利にならないようにする必要がある。人によっては、これをベーシックインカムのような形で保障して、社会のいろいろな役割を果たせるようにしていくべきだという考えもあるわけです。

しかし、今すぐそうなるかどうかわかりませんので、まずはケア労働者や相談員の方々の賃金や労働条件を上げていくべきだと思います。そういうことについてきちんと考えて、評価していくことが必要だと思っています。

永井：ありがとうございます。木本先生どうぞ。

木本：ご質問いただいた事例についてですが、私が最後にご紹介した古本屋さんの地域活動というのは全く違ってしまっていて、彼らはすごく強力な仲間関係を持っていて、いろいろなイベントをやるのです。先ほども申しましたが、例えば、廃校になった小学校を活用して、その教室ごとにお店を、住民の皆さんに呼び掛けて出してもらおうというようなイベントです。言ってみたら、地域活性化にものすごく役割を果たしているのですが、行政からお金をもらう仕事はある意味一切しないということなんです。

自分が納得いく面白い活動、そして仲間を呼び集めて、またいろいろな人たちに来てもらおうという、そういうイベントにたいへん熱を入れているのです。そこから報酬が上がってくるというように、あるいは、わずかでも何かしら活動のための費用をもらうという発想が実はない人たちなのです。

いろいろな地域の中でこうした動きはけっこう出てきていると思うので、政策的な方針とは少しずれている、特に就職氷河期世代を中心とした静かな活力が、各地域の中にあるなと思っています。その中心的な担い手が、やはり非正規の人たちや、それからご紹介しました零細自営業主たち。時間的余裕を自分で作り出せるという人たちで、彼らは仲間同

士の活性化と、ひいては地域活性化につながればということを狙っています。

ですから、収入とはほとんど関係がなく、地域の活性化が自分たちの活性化になるという考え方で取り組んでいるものと思います。ですから、他方でやはり女性と限定して、女性が地域の中でいろいろな母親的な活動をして、それに対して低いペイでという政策的な動きについて私はあまり直接的な事例を知らないのですけれども、低収入である、あるいは無収入の場合もあるという形の活用の仕方はすごく問題があると思っています。

それは公務労働の中でも、図書館などいろいろな専門的知識を本来必要とされている人々の働き方が、期限を切られていたり、非常に低い賃金で、1人で生きていくにはとても足りないような賃金水準にされていたりする現実が、今展開していると思います。やはりそこをどのように押し上げていくのが、重要です。

今、岸田首相が賃上げ、賃上げと必死になって言っていることを、そういうところにきちんともともに波及させて、専門性をきちんと認めて、それなしに図書館運営も実はできませんよ、地域の生活がきちんと展開できませんよというところまで射程を広げて、賃上げと言うなら、労働組合があるところの話だけではないこととして、問題化していくことが大事になるのかなと思っています。

永井：ありがとうございます。では、杉浦先生お願いします。

杉浦：2ついただいています。まず1つは、2000年代以降、女性就労が経済的自立を意味しない状況が加速していると私は申し上げたのですけれども、それなのに自活するという新しい就労観に移行が見られるのはなぜでしょうか。人手不足を背景とする政策的な推奨によるものでしょうか。つまり、誘導されているのではないかというご指摘だと思います。

私自身は逆だと思っています、私自身の認識としては、やっと女性が「就労はまず自活でしょう」という段階に、まさに長い年月をかけてそこに立ったという認識なのです。若い女性たち、あるいは中高生の学生さんたちと話していると、例えば母親世代は、私たちの時代もそうだったのですが、あの職業に就きたい、ああいう仕事をしたいという発想だったのです。私自身も実はそういう発想で、編集者になりたいとずっと思っていて、出版社に入社して編集者になりました。

だけれども、今の学生さんたちとしゃべっていると、まず就業が継続できるか、働き続けることができるか、もうそちらから入るのです。だから、就業継続や雇用継続など自分の人生を紡いでいく時に、やはり仕事や就労というのはすごく大事なのだということが、例えば親世代を見ていても、特に娘が母親を見ていてもいろいろ学んできたのではないかなと私は思っています。

ですので、やはり発想としては逆で、やっとその地点に立てたのに、立った地点が非常に厳しいというこの状況を、何とかしなくてはいけないというのが私の認識です。でも、この厳しい状況にしてきたのは、先ほど言ったような女性の就労を取り巻く意味付け、それから、それをうまく利用してきた政策の問題があると思うので、逆にみんなが同じ地平に立った時に、それをひっくり返していくこともできるのではないかと考えています。

もう1つのご質問はそれに関係していて、女性の就労にどのような政策が必要ですかというご質問です。先ほどから雇用労働だけにこだわる、あるいは雇用労働だけでは限界があるというのは、本当にそのとおりだと思いますし、雇用労働の枠組みだけでものを語

るのは足りないことがいっぱいあると思います。

ただ、私自身はずっと雇用労働者として、企業でずっと働いてきたので、雇用労働・女性雇用があまりにもないがしろになって、どんどん追い詰められているという認識があり、雇用労働を改善したいという思いは強いです。そのための政策ということも考えていきたいと思っています。以上です。

木本：では、いただいたご質問、長い文章を書いていたいただいたので、かいつまんで、何が質問のポイントかということからお話します。労働市場全体として、特に若年層が非正規に参入していったという中で、自ら好んで非正規のキャリアを選ぶ女性、そして男性が増えてきたと感じています。そういう流れの中で、非正規のほうがまたお得ではないかと、正社員のように責任を持たなくても済むからという考えも出てきています。特に、女性の非正規増加が後押しされていくような風潮があるのではないのでしょうか。これをどう考えますか、というご質問です。

私は就職氷河期世代の調査を20年近くやっています。2005年くらいからスタートして、その人たちが今はもう中年層になっていますが、その追っ掛けもやっています。それで痛感するのは、私たちが氷河期世代の調査を始めた時は、当事者はものすごく深刻な状況に置かれていたということです。

つまり、彼らにはモデルがなかったのです。突然、新規採用ゼロという会社が軒並み出てくる中で、非正規しかないの、無職のまま高校や大学を出なくてはいけないの、ということにぶつかったわけです。その方たちにインタビューした時は、自罰的な自己評価でした。自分を罰するような、自分の努力が足りない、自分が駄目なのです、という形での。話を聞いているこちら側の胸が痛くなるくらい、本当に苦しい話し方だったんです。

しかしその後、データで見えていただきましたように、非正規化がものすごい勢いで進んでいって、ある人々にとっては周り中が非正規という時代にもうなってしまうのです。だから、別に好んで非正規や、正規と比べてどうだと特に考えなくても、手を伸ばそうとすると目の前に非正規職があるという状況になってきています。地域にもよりますけれども。

そういう中で、そちらのほうがお気楽でしょという選択をしているのではないのかという言い方自体に、私はバイアスを感じます。だって現実的に、そうした状況だったら人はどう行動するでしょうか。そして、またそういう時代を生きていく時に、生きていく技というものをみんなが持たなくてはいけない面もあります。

非正規からなかなか浮かび上がれないとしたら、ではどうしていこうか。それから、自営業を小さく始めたのだけれども、コロナ禍にぶつかって、例えば飲食などは、お客さんが来てくれない時、どうやって打って出るのかというと、同世代の業者仲間を集めて県に補助金の申請します。例えばキッチンカーを自分で仕立てて、土日ごとにイベントのある場所に運び込んで、6人くらいの業者さんでしたけれども、その人たちが、売り上げはみんなで分け合うことでコロナをしのいでいくと。そういう現実的な取り組みをせざるを得ないのです。

だから、お気楽な風潮という話は、地べたをはうようにして調査をし続けてきている人間、当事者のいろいろな思いに耳を傾けながら対話してきた立場からすると、そのように捉える風潮のほうに、どちらかというと憤りを感じます。むしろ現実的には、目の前にあ

る状態を自分でどう組織していくかということで当事者は現実的に考えます。今非正規が目の前にたくさんあるなら、非正規を選びます。試行錯誤を重ねながらも。

ただし、先ほどのさとみさんのご紹介のさいにも、彼女の本業以外の仕事を挙げました。コンビニのバイトやうどん工場の夜勤アルバイトもやっていた。非正規の仕事をしていたのです。その後、生きる意志を失いつつある人々の電話相談など、彼女の人柄が見込まれて頼まれるようになりました。あいかわらず、あまりお金にはならないのですけれども。

他方コンビニのバイトを経験しながらパン屋を開業したシングルマザーの方の話聞いた時に、ああと思ったのは、シングルで子どもを抱えながらコンビニの仕事をやっていた時に、彼女は誰からも顧みられることがありませんでした。ところが、子どもを持ちながらパン屋を開業して必死でやっていったら、お客さんが見守ってくれて、応援してくれているとのことです。「頑張ってるね。すごいね」と声かけしてもらうことで、自分自身も成長を感じることができる」と語っていました。零細なパン屋さんですから、非常に朝早く起きる大変な仕事ですし、子どもさんを抱えて走り回っているのですが、応援を受け止め、自身の成長を感じながらやっていくことができる環境は、すごいなと思いました。そしてこういう話を聞くと、普通の非正規、コンビニバイトにはそうした励ましが無い、ということを私たちは考えなくてはいけないと思うのです。

目の前に手を伸ばして非正規しかない状態で頑張っている人たちを、応援していくような態勢というもの。それがたぶん上村さんが言われる「保護」ということなのでしょうし、そういう打ち捨てられるような仕事、時間刻みで消耗品のように扱われる仕事を、その中で生きている人たちにとって、それを意味付けたり、その状況を少しでも良くしたりする、そういうムーブメントのようなものがやはり必要なだろうなと思っています。

永井：ありがとうございます。私のほうは全部お答えできるかどうか分からないですけども、特に男性はどうしているのだというご質問かと思います。このようなシングル化が進んでくる中で、男性は消費行動や貯蓄行動に、変化が見られるのかということです。

私がデータを見ている限りでは、少しタイムラグがあるのではないかと思います。男性と女性では、女性のほうが、1人で暮らしていくことの決心が男性よりも早い年齢である程度覚悟するところがあるために、消費行動、貯蓄行動に変動が見られるのではないかと考えています。

また、今回見られた家計や家事の変化といったところは、夫婦間の勢力関係や見えない権力というものを含めて大きく変えることになるかどうか分からないのですけれども、これまでの30年に比べると、少し動き出してきたのではないかと期待はしています。

木本：最後のご質問に簡単に答えさせていただきます。情報通信産業の発達以来、テレワークなどの新しい働き方が出てきたり、コロナ禍でのオンライン化が進んだりして、場所の壁がなくなる。あるいは、働く場所と居住地との時間と場所の制約がなくなっていく。そのような未来像を、どのように考えますかというご質問です。

労働全体を見渡した知見は、私は専門的に十分持っていないのですが、個別の事例として知って驚いたことは、典型的な会社人間をやってきた私のゼミの教え子が、コロナ禍をきっかけとしたオンライン化の中で、家族との関係を大きく変えていきました。そして、大手企業のエリートコースの先端を走っていた彼は、最終的には会社を辞めました。

そして、小さなチケット販売会社に勤めるようになったのです。何があったのかというのはまだ詳しく聞いていないのですが、ただ彼の言い方によると、まず家でオンラインで働いている時に、娘と妻が自分の働き方を見てびっくりしたと言うのです。つまり、「お父さんはこんな長い時間ずっと働いていたのか」と。会社の人と酒を飲んで遅く帰ってくるのかと思っていたという、すごい誤解があって。家族との関係も変わったそうですし、それから彼自身も、最先端のエリート社員としていだけ使われてきたということがあって、どうもそのことを捉え返す時間になったようなのです。

そういう意味では、距離感というのはものすごく大きいものがあるのだと思います。最終的に彼は有給休暇を全部使って、東京オリンピックのボランティア活動にまい進して、会社を辞めたのです。だから、すごく思い切ったことをやったものだと思うのですが、彼は娘も大学を卒業して見通しがついて、自活していこうと。自分たち夫婦が老後を生きていくために、別に大手の会社のエリート社員にぶら下がっている必要もない、という判断でした。

会社生活との距離感が、そのような人を生み出したということ、これはすごいなと思ったりします。働き方が変わるとエリート社員もこうも変わるのかという、一つの生き様変容を見せてもらったと思っています。やはり働くことと暮らすこと、その時間と場所、そして距離感というのは、ものすごく大きな要素に今後なっていくのだろうなという予感がします。

永井：ありがとうございます。働くということや、働くことをどう扱うかということ、なかなかいろいろな側面から、今回は「女性が働くことの意味を問う」ということについて議論できて、非常に有効な時間を過ごすことができたかと思います。

その中で幾つかキーワードが出てきて、前半部分での、主婦性への距離感というものが少し薄らいできたかもしれないということ。でも一方で、主婦性の代わりに家庭の中での貢献というか、これは家計の中でも少し減ってきたのではないかと思ったのですけれども、やはり地域での、あるいは会社の中でも女性がケアしていますよね。そういう、もう少し公的な場所での「主婦性」が求められるなどです。

そういったシット・ジョブやブルシット・ジョブとの関連というのは、引き続き考えていくことが必要なのだということが課題として残ったかと思います。今後とも、これはすごく重要な問題ですので、皆さまにいろいろなご意見を頂きながら研究を進めていければと思います。

これを閉会のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。